The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	甘粛省出土簡牘調査報告
Author(s)	中国出土文献研究会
Citation	中国研究集刊. 2014, 59, p. 138-158
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/58646
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　珠号（総五十九号）平成二十六年十二月　一三八―一五八頁

甘粛省出土簡牘調査報告

中国出土文献研究会

一、学術調査の概要

中国出土文献研究会は、二〇一四年九月一日～五日の日程で、中国上海および甘粛省蘭州において出土簡牘の学術調査を行った。

これまで、研究会では、主として戦国簡を対象として調査研究を進めてきたが、今年度からは、秦漢期以降の出土資料にも視野を拡大することにした。その最初の活動が、この海外学術調査である。

実は前年、香港に赴き、香港中文大学文物館蔵簡牘を拝見して現地研究者と会談した際、『甘粛省第二届簡牘学国際学術研討会論文集』のことが話題となり、また、同館所蔵の漢代簡牘の一部が甘粛省あたりで出土したものではないかとの推測をうかがった（詳細については、草野友子「「香港中文大学文物館蔵簡牘」実見調査報告」（『中国研究集刊』第五十七号、二〇一三年）参照）。その頃から、我々は、甘粛省での簡牘調査の必要性を強く感じていたのである。そこで、今回、上海を経由して、甘粛省蘭州に赴くこととした。旅程は次の通り。

九月一日　関空集合。午後便で上海へ。上海泊。
九月二日　上海博物館訪問。午後便で蘭州へ。蘭州泊。
九月三日　午前、甘粛省博物館参観。午後、甘粛省文物考古研究所・甘粛簡牘博物館訪問。
九月四日　各博物館等訪問の報告書執筆についての打ち合わせ。炳霊寺石窟（二〇一四年六月世

調査の道程（大阪から上海を経由して蘭州へ）

界文化遺産登録）視察。

九月五日　朝便で蘭州発。上海を経由して帰国。関空で解散。

参加メンバーは、湯浅邦弘（大阪大学教授）、竹田健二（島根大学教授）、福田一也（大阪教育大学非常勤講師）、草野友子（京都産業大学特約講師）、中村未来（大阪大学助教）、白雨田（京都産業大学非常勤講師）の六名である。上海も蘭州も、すでに初秋の気配。幸い天候にも恵まれ、全日程を無事消化できた。

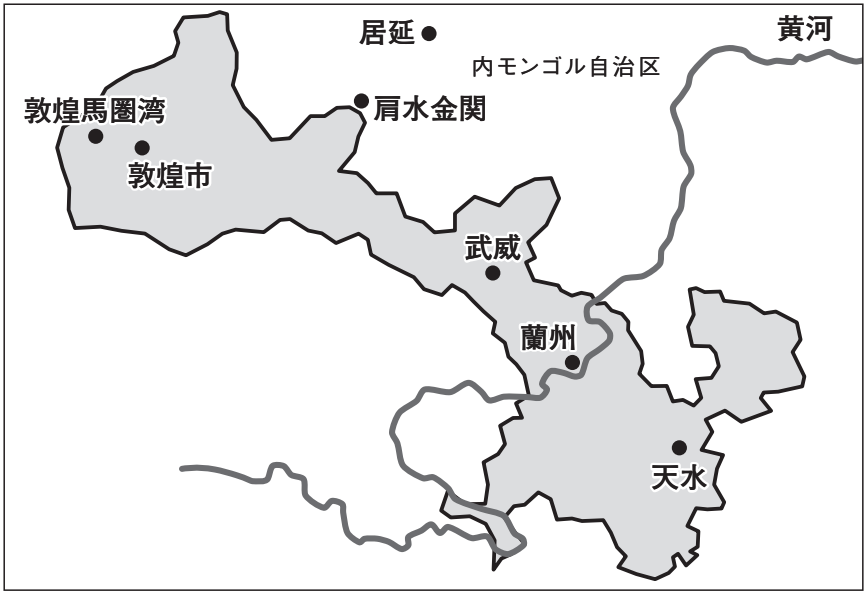
九月二日、上海博物館では、昨年同様、葛亮研究員との会談が実現した。博物館が現在最も力を入れているのは、同館所蔵の青銅器の調査、および図録の刊行である。数年内に全容を公開するが、その際、銘文のある青銅器千三百件を中心とするので、未公開の金文資料が多数公表されることになるという。古文字学研究にとって極めて大きな出来事になろう。

一方、上博楚簡については、担当者の減少により、作業の進捗状況が芳しくないとのことであった。『上海博物館蔵戦国楚竹書』は現在第九分冊まで刊行されているが、この後の分冊、および、楚文字の字書（『字析』と仮称されている）の刊行については、まだ具体的な目処

が立っていないとのことである。但し、全竹簡について写真撮影は終了しているという。

同日午後、我々は上海を後にした。虹橋空港から国内便で約三時間、蘭州空港に到着。空港では、一九六九年十月に武威市北郊の後漢時代の墓から出土した「銅奔馬」（別名「馬踏飛燕」）の巨大な像（実物の十二倍）が

上海博物館での会談、右端が葛亮氏



甘粛省出土文献関連地図

出迎えてくれた。蘭州は甘粛省の省都で、漢代に金城郡が置かれていたことから、古名を金城という。人口約三百八十万。市街の標高は約千五百メートル。町の南北に山が迫り、その中央を西から東に黄河が流れる。

翌日、午前中に甘粛省博物館を参観した。特に注目されたのは、二階の「絲綢之路（シルクロード）文明展」である。ここでは、武威漢簡『儀礼』や敦煌懸泉置出土『論語』木簡など、多くの簡牘資料が展示されていた（詳細については、本稿第二章参照）。

昼食後、甘粛省文物考古研究所・甘粛簡牘博物館に向かった。この訪問については、蘭州城市学院・簡牘研究所の孫占宇先生のご高配を得た。研究会メンバーの草野友子が、かつて日本学術振興会特別研究員として武漢大学簡帛研究中心に滞在中、当地の学会で孫氏と面識を得ていたこともあり、孫氏を通じて、訪問と会談を申し入れ、実現したものである。

玄関で出迎えを受けた後、直ちに地下倉庫に招かれ、約一時間半、孫氏、楊眉副研究員、韓華館員の立ち会いの下、居延新簡、天水放馬灘秦簡、敦煌馬圈湾漢簡、敦煌懸泉置漢簡、肩水金関漢簡の実見を行った（その詳細については第三章参照）。その後、三階の会議室に場所を移し、約一時間半、孫氏、韓氏、副研究員の肖従礼氏、馬智全氏と会談した（会談の詳細については第四章参照）。張徳芳所長は別の会議中であったが、この会談の最後のところで同席され、挨拶を交わすことができた。ちなみに、孫氏らは西北師範大学の卒業生で、いずれも張徳芳氏の弟子にあたるという。

今回の簡牘視察で特に心に残ったのは、甘粛省文物考古研究所で拝見した多数の簡牘類である。完簡・整簡もあったが、ほとんどは残簡で、中には、木簡の一部の表面を削り取ったものが台紙に貼り付けられているという状況であった。こうした残簡をも一枚と計算すれば、これまで我々研究会メンバーが一度に実見した簡牘の内、数量という点では、おそらく最多であろう。

しかし、これらの整理に当たっている専従の研究員は、会談に参加していただいた方を含む四～五名程度とのことである。その数量からすれば、気の遠くなるような作業である。また、甘粛省には、これ以外にも、フィールド簡が発見される可能性は高く、極端に言えば、強い風が地表の砂を吹き飛ばせば、その下からまた新たな簡牘が見つかるかもしれないとのことであった。甘粛省は出土簡牘の宝庫であるが、その全容が解明されるのには、まだ相当な時間がかかると感じられた。

（湯浅邦弘）

二、甘粛省博物館参観

九月三日午前、蘭州市西津西路三号にある甘粛省博物館を訪れた。甘粛省博物館は、一九三九年に創設された甘粛科学教育館をその前身とし、一九五〇年に西北人民科学館と改名された後、一九五六年、現在の甘粛省博物館へと改編された。約三十五万点もの収蔵物を有し、その中には国宝級の文物十六点が含まれているという。

展示物は「甘粛絲綢之路文明」「甘粛彩陶」「甘粛古生物化石」「甘粛仏教芸術」等、テーマ毎に展示室を分けて配置されており、彩陶や仏典・仏像、行政文書等、シルクロードの中継地および西北辺境の防塞要地として栄えた甘粛省ならではの特色ある文物を多く観覧することができた(注1)。

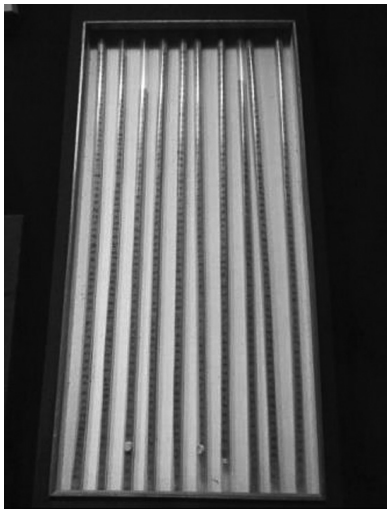
中でも、特に注目されたのは、簡牘資料の展示である。甘粛省博物館編・俄軍主編『甘粛省博物館文物精品図集』(三秦出版社、二〇〇八年十二月)によれば、甘粛出土の簡牘は総計六万枚以上にものぼり、漢字を始め、カローシュティー文字・吐蕃文字・ウイグル文字・西夏文字の五民族の文字文献が見られるという。また、その内容も政治・経済・軍事・文化・教育・交通・防衛・郵政等、多岐に渡ると指摘されている。実際、博物館では、「烏孫貴人伝舎制度簡」「西域使者計簿」「于闐王行道簡」等の歴史的背景や当時の様子を窺い知る上で重要な行政文書関連の木簡牘や、武威旱灘坡出土『医薬簡牘』、武威磨嘴子出土『儀礼』(以下、武威漢簡『儀礼』)、敦煌懸泉置出土『論語』(以下、懸泉置漢簡『論

甘粛省博物館

語』）等の木簡典籍の実物を閲覧することができた。とりわけ、中国古代思想を研究対象とする我々にとって、武威漢簡『儀礼』と懸泉置漢簡『論語』の木簡を実見することができたのは幸いであった。以下、両文献の概要を紹介し、その意義について若干の私見を述べてみたい。

（1）武威漢簡『儀礼』について

武威漢簡『儀礼』は、一九五九年、武威新華郷磨嘴子より発見された三十数基の漢墓の内、その第六号墓（王莽期と推定）から出土した木簡群である。簡長は約五十一～五十七cm、幅は〇・五～〇・九cm、総数は四六九簡。編綫の数や字体、各簡に記された文字数等から甲乙丙の三篇に分類されており（注2）、この訪問中に閲覧することができた木簡は、形制やその文献内容から、甲本の『儀礼』犠牲饋食礼であったと考えられる（注3）。木簡は試験管の中に各簡毎に保存され、脱水処理や真空処理は施されていないようであった。試験管は合計十簡分。五十cmほどの箱の中に整然と並べられて展示されていた。


武威漢簡『儀礼』（木簡）

武威漢簡『儀礼』については、後漢・鄭玄が注を施し、その後、現行の十三経に収められた『儀礼』（古文系テキスト）と一部異なる箇所があることが、先行研究においてすでに指摘されている（注4）。また、「経」と「記」との融合や独立性等、『儀礼』の成立に関する研究でも注目を集めている（注5）。郭店楚墓竹簡や上海博物館蔵戦国楚竹書にも「礼」に関する文献が多数含まれているが、それらの文献同様、武威漢簡『儀礼』は文字の変遷や経書の伝播・受容を辿る上で、貴重な一次資料であると言える。

（2）懸泉置漢簡『論語』について

懸泉置漢簡とは、敦煌にある漢代の懸泉置遺跡より出土した約二万三千枚の簡牘群を指す（注6）。郝樹声・張徳

芳著『懸泉漢簡研究』によれば、紀年簡のうち、最も早いものは武帝元鼎六年（前一一一）、最も晩いものは後漢安帝永初元年（一〇七）であるという。また懸泉置漢簡には、『論語』子張篇の残文（木簡二簡）が含まれており、その内の一簡は簡長二十三cm、幅〇・八cm。もう一簡は、簡長十三cm、幅〇・八cm。いずれも松材を使用していたと指摘されている。今回の訪問時に展示されていた簡は、前者一簡（五十五字）のみであった。

実見した木簡は、ガラス板や試験管に入れられて保存されているというわけではなく、固定する紐や台紙も見られなかった。該当簡の内容と現行本『論語』の内容とを対照すれば、次のとおりである。なお、比較の便を考慮し、釈文は全て新字に改めた上、章毎に改行して掲載している。

懸泉置漢簡『論語』（木簡）

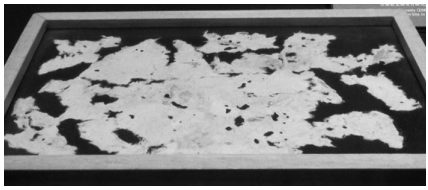
懸泉置漢簡『論語』（注7）	現行本『論語』子張（注8）
（……）乎張也、難与並而為仁矣」。 | 曾子曰「堂堂乎張也、難与並為仁矣」。 |
●曾子曰「吾聞諸子、人未有自致也者、必也親喪乎」。 | 曾子曰「吾聞諸夫子、人未有自致者也、必也親喪乎」。 |
●曾子曰「吾聞諸子、孟荘子之孝、其他可能也、其不改父之臣、与父之（……） | 曾子曰「吾聞諸夫子、孟荘子之孝也、其他可能也、其不改父之臣、与父之政、是難能也」。 |

木簡に記述された内容は、墨点（「●」）により章毎に区切られていた。ここから、実見した一枚の木簡には、三章に跨がる内容が記載されていたことが窺える。現行本『論語』と比較すれば、木簡には「難与並」と「為仁矣」との間に「而」字が挿入されており、「諸夫子」の「夫」字や「孟荘子之孝也」の「也」字が脱落していることが分かる。また現行本における「者也」が「也者」と転倒して表記されている等、僅かな相違が認められた。

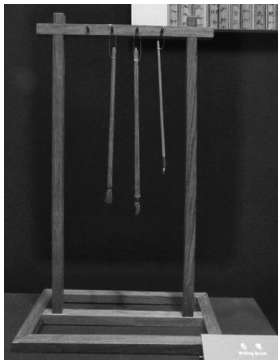
漢代の『論語』テキストとしては、すでに河北省定州市から定州簡『論語』、また北朝鮮平壌市から平壌簡『論語』が出土している。この懸泉置漢簡『論語』は、漢代において、東の辺境で発見された平壌簡『論語』同

様、西北の地にも『論語』が広く流布していたことを示す重要な資料であると考えられる。武威漢簡『儀礼』に同じく、懸泉置漢簡『論語』も経典の流布・変遷や文字学研究を行う上で、不可欠な文献であると言えよう（西北地域における典籍（主に思想文献）については、本稿第四章参照）。

今回の甘粛省博物館参観は、簡牘資料の実見が主たる目的であったが、敦煌市馬圈湾遺跡より出土した筆や、酒泉市金塔県より出土した肩水金関紙といった、前漢期の筆記用具をはじめとする考古文物を閲覧することができたことも収穫であった。



肩水金関紙



毛筆（敦煌市馬圈湾出土）

近年、発見され整理されている新出土文献には、出土地不明の盗掘簡や骨董簡が多いが、それに対して、甘粛省博物館に展示されている大部分の簡牘は出土地が明確である。これらの簡牘に上記のような同時出土の考古文物を組み合わせて検討することで、多様な民族文字や漢字の書体の変遷過程に加え、当該期の社会情勢や辺境生活の実態に関する新知見が得られる可能性が高まるであろう。これらは西北文化を考える上で重要な一次資料であると考えられる。

（中村（金城）未来）

三、甘粛省文物考古研究所・甘粛簡牘博物館での出土簡牘実見

九月三日午後二時、我々は宿泊先のホテルから専用車で甘粛省文物考古研究所・甘粛簡牘博物館へと向かった。多少の渋滞はあったものの、約三十分ほどで目的地に到着。大通りから路地を一本入ったところに位置する研究所は、二年前に建てられたそうで比較的新しい。研究所の玄関で、我々は蘭州城市学院・簡牘研究所の孫占

宇氏の出迎えを受けた。文物考古研究所の副研究員である楊眉氏の案内で、我々一行は地下の資料庫へと移動。室内には二台のテーブルが用意され、それぞれ六～十個ほどのトレーに納められた資料が我々を待ち受けていた。そして、孫氏・楊氏および同館館員の韓華氏の立ち会いのもと、早速資料の実見を開始した。我々は準備された資料を各々自由に参観しつつ、気になる点については各自が質問を行った。今回実見した簡牘資料は次の通り。（参考までにそれぞれ簡単な出土情報を記しておくが、もちろん我々が実見したのはその一部である。）

甘粛省文物考古研究所

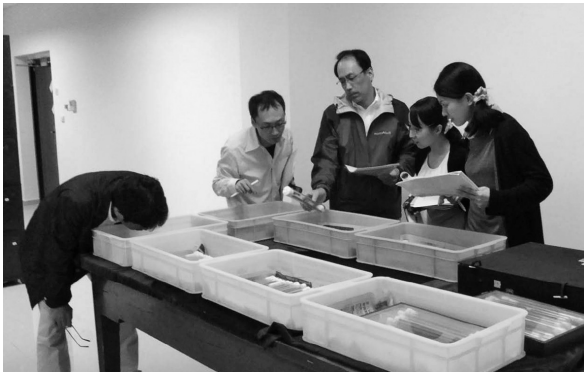
・居延新簡（漢代～西晋、一九七〇〇枚余り、一九七二～七四年出土）
・敦煌馬圈湾簡牘（前漢宣帝期～王莽期、簡牘一二一七枚、一九七九年出土）
・敦煌懸泉置漢簡（前漢武帝期～王莽期、簡牘二三〇〇〇枚余り、一九九〇～九二年出土）
・肩水金関漢簡（前漢武帝期から約二百年間、二万枚余り、一九三〇年代・七〇年代出土）
・天水放馬灘秦簡（戦国晩期（注9）、竹簡四六一枚、木版（古地図）七幅、一九八六年出土）

（1）居延新簡・馬圈湾簡牘

最初に実見したのは居延新簡である。木簡は一簡ずつ試験管に収められ、上下に綿を詰めて固定している。試験管内に溶液などは入っておらず、木簡を直に挿入した状態で保管されていた。字跡は明瞭で、一行のものや両行（二行）のものがあり、木目もはっきりと見える。後

漢光武帝の「建武三年」（二七年）の紀年をもつ木簡は、行政関係の文書ではあるが、その文字の流麗さは観る者を魅了する。我々中国学関係の研究者のみならず、多くの書道家が見学に訪れるというのも頷ける。

続けて、「馬圈湾」と箱書きされた敦煌馬圈湾漢簡。王莽期の紀年を有する簡もあり、木簡の形状や筆跡も実



敦煌馬圈湾簡牘の実見

に多様である。全体的には横長で角張った隷書体のものが多いが、中には草書体のようなさらさらと書写された簡もあり、人目を引く。孫氏によると、「これは正式な文書を作成する前の草稿のようなものかも知れない」とのことであった。これらの木簡中には、ナイフで切りつけたような跡が見えるものもある。そこで竹田健二が木簡背面の劃線（注10）の有無について質問したが、木簡にはそのような例は見られないという。また、馬圈湾からは竹簡十六枚も出土していることから、筆者（福田）が「竹簡はありますか」と尋ねてみたが、「あるにはあるが極めて少なく、またそれは南方からもたらされたものらしい」とのことであった。

（2）敦煌懸泉置漢簡・肩水金関漢簡

「縣泉置」の三文字が謹直且つ骨太の字体で書写されているのは、甘粛省博物館にも展示されていた敦煌懸泉置漢簡（本稿第二章参照）である。甘粛省博物館で当地より出土した『論語』の残簡（一簡）を参観していた我々は、早速、その総数について尋ねてみた。出土した『論語』は僅か二簡であり、いずれも今は展示中で倉庫にはないという。中国思想史を専門とする我々にとっては、もう一簡についてもぜひ実見しておきたかったが残

念である。今回我々が目にした懸泉置漢簡のうち、一部はまだ写真も撮り終えていない未公開の木簡であった。そのトレーには大小様々な木簡が雑然と置かれており、一見してそれらの書写者が異なることがわかる。未公開の木簡まで実見できたのは大きな収穫だったが、これらの整理にはまだかなりの時間を要するように思われた。

敦煌懸泉置漢簡の実見

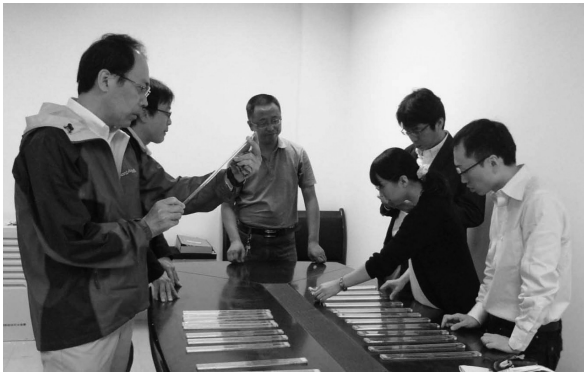
このほか、懸泉置より同時に出土した毛筆などの出土文物についても、特別に見学を許可された。細筆が一本とハケ状の筆が一本。経年劣化のためか、筆先はかなり乱れている。さらに、筆入れのような木製の筒、木製の櫛、そして取っ手が亀の形に掘られた愛らしい木印もあった。

最後に実見した木簡は、一九七二年から一九七四年にかけて肩水金関から出土した漢簡である。一見して干支などが視認できる簡も多かったが、赤外線写真ではより鮮明に文字が見えるという。中には、「削衣」（修正などで木簡の表面を削った際の木片）も数点含まれており、これらは台紙に貼り付けて整理されていた。この中で一際目を引いたのは、木の棒を四面に削って文字を記した「觚（こ）」である。四面に文字が敷き詰められ、経年のために大きく湾曲したその形状は、何とも言えない異様な雰囲気を醸し出していた。今後、このように湾曲した木簡をどのように保存していくのかが課題の一つであるという。なお、肩水金関漢簡については、出版に関する作業はすでに終えており、これから保護作業を中心に行っていくとのことであった。

（3）天水放馬灘秦簡

木簡の海の中でふと時計を見ると、すでに一時間が経過していた。これまで博物館などで目にした木簡の総量を、おそらく今日一日で超えたことであろう。上海から飛行機や車を乗り継ぎ、五時間近くかけて当地を訪問した甲斐は十分にあったといえる。だが、筆者には何かまだやり残した感があった。それは竹簡の実見である。本研究会ではこれまで竹簡を中心に調査を行ってきたため、たとえ一簡でも甘粛省出土の竹簡を手に取ってみたいという思いがあった。甘粛省出土の簡牘はその大半が木簡であり、準備されていた資料も全て木製品であったので、今回、竹簡の実見は適わないかもしれないと筆者は感じていた。しかし、その思いを抑えきれず「竹簡はありませんか」と尋ねてみた。すると、「有」との回答。陳列される竹簡を前に、心は高鳴った。

今回実見した竹簡は、天水放馬灘秦簡の甲種・乙種各十二枚。竹簡は一枚一枚平板なアクリルケースに入れられており、各自手に取って見学することができた。内容は占いに関するもの（いわゆる「日書」）で、「新しい衣服をいつ着るか」、「外出に良い日時はいつか」など、日常生活における吉凶などが記されている。実見した竹簡はかなり細く、肉眼では判読不能な文字も多い。近年出版された張徳芳主編・孫占宇著『天水放馬灘秦簡集釈』（甘粛文化出版社、二〇一三年）のカラー図版のほうが遥かに鮮明である。背面も見てみたが、保存用の薄い紙が敷かれていてよく見えず、劃線の有無などは確認できなかった。ただし、表側（書写面）が上下二段に分段筆写されていることは確認でき、孫氏みずから三道編綫の



天水放馬灘秦簡の実見

跡を我々に示してくれた。また、竹簡を少し斜めから眺めると、その表面がきらきらと輝いていることに気づいた。この点を竹田健二が質問すると、「これは脱水処理後にできたもので、薬品の影響かも知れない」、また、「脱水処理後は竹簡の色が薄くなった」とのことであった。

ここで中村未来が、甲種に巻かれていたという布について質問を行った。孫氏は、「発掘報告には青い布に巻かれていた痕跡があったと記されているが、自分が見たときはすでに竹簡は試験管に入っており、布は見ていない」という。続けて、「わざわざ布に巻いて副葬されていたのは、甲種が乙種より正式な書と考えられていたためか」と質問すると、「甲種は乙種の一部しか採録していないので、乙種が早く成立したと推測される」との考えを示された。いずれにしても、これまで竹簡をこのように布で装丁する例はなく、非常に珍しいものであるという。

まだまだ質問は尽きず、もっと竹簡を見ていたいという思いもあったが、実見の開始からすでに一時間半が経とうとしていた。さらなる質問は場所を変えて行うこととし、我々は資料庫をあとにした。

（福田一也）

四、甘粛省文物考古研究所・甘粛簡牘博物館での会談

簡牘の実見調査後、我々は館内三階の会議室に移動し、午後四時～午後五時半まで会談を行った。孫占宇氏のご配慮により、同館館員の韓華氏、副研究員の肖従礼氏、馬智全氏にも同席いただくこととなった。以下、会談での主な論点を三つの項目に分け、それぞれの内容について報告したい。

（1）施設相互の関係と資料の公開状況

会談において、我々がはじめに質問した内容は、甘粛省博物館と甘粛省文物考古研究所、そして現在建設中の甘粛簡牘博物館との関係である。その回答は、以下の通りであった。

甘粛省文物考古研究所は、一九八六年以前は甘粛省博物館の文物工作隊として博物館に所属しており、一九八六年に独立した。二〇〇七年には甘粛簡牘保護研究中心が設立されたが、実際には文物考古研究所と重複する組織であり、研究者も同一である。ただし、仕事の内容上、文物考古研究所と簡牘保護研究中心の二つの名称を持ち、二種類の仕事を同時に行っている。二〇一二年末

には、簡牘保護研究中心を甘粛簡牘博物館と改称して独立させ、現在では甘粛省博物館・甘粛省文物考古研究所・甘粛簡牘博物館は、三つの独立した組織となっている。そして、これらはいずれも甘粛省文物局に属している。このような経緯から、研究者は、文物考古研究所と簡牘博物館とを兼任しているという複雑な関係になっている。

会談の様子

我々が訪問した建物は、簡牘博物館の辦公室（事務室）という位置づけであり、別の場所に一般参観用の博物館を建設する計画が進められている。ただし、現時点では建設地は未定であり、五年後の完成を目指しているとのことであった。すなわち、簡牘博物館とは言っても、我々が訪問した場所は一般参観ができる施設ではなく、館内に資料が展示されているわけでもない。従って、資料調査のために訪問するならば、事前に連絡をして許可を得、特別に実見をさせていただくという手順が必要になる。

現在、簡牘の整理に当たられているのは、この日会談に出席された四名（孫占宇氏、韓華氏、肖従礼氏、馬智全氏）が主要メンバーであるとのことであった。前述の通り、建物の中には文物考古研究所と簡牘博物館の二つの部局があり、この日実見した簡牘はすべて簡牘博物館の所蔵となっている。

簡牘博物館には、全部で約六万枚の簡牘が収蔵されている。主なものは天水放馬灘秦簡や漢簡（居延新簡、敦煌馬圈湾漢簡、敦煌懸泉置漢簡、肩水金関漢簡等）であり、そのほとんどがすでに基礎的な整理を終えている。居延新簡・敦煌馬圈湾漢簡・天水放馬灘秦簡は、すでに

釈文・図版が公開されており、肩水金関漢簡は現在公開が進んでいる(注11)。敦煌懸泉置漢簡については、約二万三千枚の簡牘が存在するが、未整理の状態で、まだ正式な出版もなされていない。

(2) 出土文物に関する質問

今回の実見調査の際、懸泉置から出土した筆を見せていただいた(本稿第三章参照)。そこでまず、墨で書く筆は相当早くから使われていたのか、という質問をしたところ、新石器時代にはすでに彩陶を書くのに筆は必要であったと考えられるが、書写という行為がいつ頃から始まるのかという問題については定かではない、との回答であった。ただし、殷代にはすでに書写のための筆が存在していた可能性があるとの見解も述べておられた。筆の材質については、その地域で現地調達されているものであり、羊・狼・兎の毛が多く、当館に保存されている筆の一本は狼の毛、もう一本は羊の毛であるとのことである。

次に、竹簡と木簡の保存方法に違いがあるのか、という点について質問した。これについては、当館において脱水処理が施されたのは天水放馬灘秦簡の四百六十枚あまりのみであり、これは発見された当時すでに水の中に浸かっていたため、脱水・整理が行われ、すでに十数年経過しているとのことであった。居延新簡・馬圈湾漢簡・懸泉置漢簡などは、埋めてから間もなく、乾燥した気候の中で自然に脱水状態になり、それゆえ発見された当時から人工的な処理は一切行われず、今現在まで保存されてきたそうである。ただし、今後はこれらの木簡についても、自然のままではなく、保護措置を施す予定であると述べておられた。その方法は主に二種類で、一つは、曲がった簡をまっすぐにした後に試験管の中に入れ、そこにガスを入れてから密封して保存する、というもの。もう一つは、直接試験管の中に入れて密封する、というものである。武威漢簡『儀礼』は、後者の方法で保存されており、三、四十年経っても変化が見られないため、このような保存方法はコストも低く有効である、といった見解も述べておられた。

甘粛省出土簡牘に木簡が多く竹簡が少ない理由については、現地で採取できる材料によるところが大きいとのことであった。木簡に関しては、使用されている木材は主に三種類あり、紅柳、胡楊、松である。竹簡に関しては、天水放馬灘秦簡は、もともと竹が生息する地域であったために、竹簡が使用されているとのことであった。書写材料と内容の関係については、竹簡にしろ木簡

にしろ、書写されている内容とは直接的には関係がなく、内容によって材質が変わるということはないであろうとの見解を示された。なお、当館所蔵の竹簡の中には、現地の素材ではないものが含まれているそうであり、内地から西北に赴任した役人が持参したものではないかと考えられている。ただし、このような竹簡は五十～七十枚程度であり、その内容は身長・体重・年齢・肌の色などを記した身分証明の役割を持つものであるとのことであった。

会談の様子

また、近年、北京大学蔵西漢竹書（北大漢簡）をはじめとする竹簡背面の劃線が注目を集めており、この点についても質問した。典籍になっていない古佚文献を研究する際にしばしば問題となるのは、竹簡の排列をどう復原するか、という点であり、劃線は復原の手がかりになると考えられている。そこで、甘粛省出土の簡牘にはそのような現象が見られるのか、と質問したところ、以下のような回答があった。背面の劃線には興味を持っているが、西北簡に関しては背面の写真を撮影したことがなく、その存在を考えたこともなかった。西北簡の排列については、ほとんどの場合、竹簡の裏面に通し番号が書かれており、すべてその番号によって排列されている。ただし、背面に番号がない簡も一部あり、日本の大庭脩氏が整理・復原したものの中にも背面に番号がない簡がある（注12）。

武威漢簡『儀礼』については、表面に通し番号があるが、これは先に編号を書き、冊書を作ってから書写されたものと考えられている。居延新簡や敦煌馬圈湾漢簡などは、まず先に編綴されてから書写されているため、順

序がわかりやすい。孫氏によると、西北簡に関しては、ある程度規則があり、炭素測定値や筆跡・素材が一致した場合は、それによって排列がわかる。天水放馬灘秦簡は、上段・下段の二段に分けて書写されているため、例えば、下段のロジック関係がわからなくても、上段にある程度ロジック関係がある場合には順序がわかる。また、文献を復原する際には特殊な符合にも注目しており、天水放馬灘秦簡の中には、書き始めの部分には四角の墨点（「■」）があり、書き終わりの部分には縦の一本の線「｜」（現代の「。」のような役割）があるため、それに基づいて文献の一部を復原したことがある（詳細は、孫占宇「放馬灘秦簡編連十二例」（『簡帛』第八輯、武漢大学簡帛研究中心主編、上海古籍出版社、二〇一三年）参照）、とのことであった。

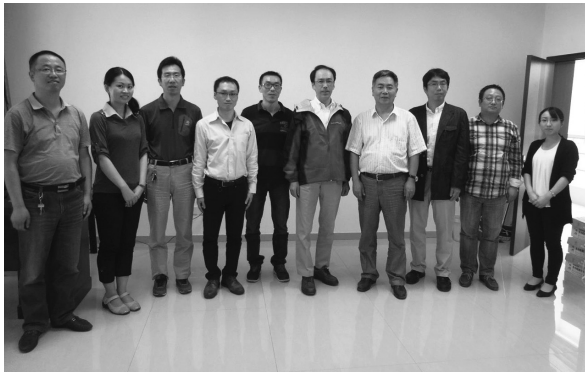
（3）文献の内容に関する質問

まず、「日書」に関わる問題について、「日書」の中には、夢占いに関する記載が多く見られるが、一方で、岳麓書院蔵秦簡には夢占いを扱った『占夢書』がある。そこで、「日書」と「占夢書」の関係について質問したところ、「占夢書」に関しては、現在中国で大きく二つの観点があるとのことであった。一つは、数術類も「日書」に属されるため、「占夢書」も「日書」の一部と考えるもの。もう一つは、「日書」は日を選ぶ「擇日書」であり、それ以外のものは含めない、と考えるものである。岳麓書院蔵秦簡の整理者は「日書」のことには言及せず、「占夢書」と命名している。孫氏は、この問題は非常に難しいが、北京大学所蔵の簡牘の中にも「日書」が含まれていることから、すべて占いと関係があるのではないか、との見解を示された。

天水放馬灘秦簡の乙種の中の六枚は、最初は「墓主記」と名付けられていたが、後に「志怪故事」と命名された。これに対して孫氏は、「志怪故事」を「日書」の一部として分類し、「丹」と名付けた。この文献は、丹という男が傷害罪により処刑され、三年後に復活するという内容であり、北京大学蔵秦簡牘『泰原有死者』（死者が蘇り、死後の世界と埋葬時の注意事項などを述べるという内容。全容は未公開）との関連が注目されている。孫氏によると、「日書」は睡虎地秦墓竹簡の出土時にその存在が明らかとなり、伝世文献の中には「日書」という言い方すらなく、その定義ははっきりとはわからない。孔家坡漢簡の「日書」を整理した武漢大学の劉国勝氏は、数術類もすべて「日書」に分類しても良いのではないかという見解を提示されている、とのことであった。

次に、懸泉置漢簡『論語』に関わる問題について、懸泉置漢簡『論語』は一九九一年に発見され、すでに論文も発表されており、特に韓国の研究者たちが精力的に研究しているとのことである（本稿第二章参照）。このような、いわゆる典籍の類が『論語』以外に甘粛省で出土しているのかどうかについて質問したところ、現段階で典籍類を最も含んでいるのは懸泉置漢簡であるが、何枚あるかは未発表で、公開しているものも数枚だけであるとの回答であった。また、肩水金関漢簡にも『論語』や『孝経』に関連する簡が含まれているとのことであった(注13)。馬氏は以前、これらの典籍類と『漢書』芸文志とを細かく比較された経験があり、その範囲は基本的に「六芸略」の中に包括されるそうである。また、敦煌や居延などの遺址からは、武威漢簡『儀礼』のような大型の典籍が出土することはほぼ不可能であり、出土するならば古墓からしかないだろうとの見解も示されていた。

総じて、典籍類の簡牘は基本的に極めて量が少なく、断簡が多い。肩水金関漢簡の中にも一部典籍類、例えば経書や数術類に関わる簡はあるものの、量は非常に少なく、一枚しかない場合もあるとのことであった。典籍類が少ない理由については、二つの観点を提示された。一つは、典籍類がわずかながら発見されている以上、西北の地は文化の砂漠ではなく、知識人がいたことの証明になると考えるものである。もう一つは、西北は辺境の地であるから、やはり全体的に見て文化が低いと考えるものである。例えば、西北において「蒼頡篇」や「急就篇」などの小学類の書が大量に発見されているが、文献のはじめの部分のみであるものも多い。その理由は、役人が



会談後、先生方と

辺境の地に赴任した際に、かつて覚えた文献の冒頭部分を書き写したものかもしれない、とのことであった。現時点では推測の域を出ないが、このような問題は、西北簡の中の典籍類の公開が進むことにより、徐々に明らかになっていくであろう。

甘粛省出土の簡牘は、二十世紀半ばにはすでに整理・研究が開始しており、他の新出土文献と比べても研究の歴史が長い。また、簡牘のほとんどは出土地が明らかであり、これは研究する上での強みとなっている。膨大な量の簡牘に囲まれながらも、着実に整理・研究を推進されているのは、研究基盤が整っているからこそであろう。今回の実見・会談を通して、我々は現地研究員の方々の簡牘研究に対する熱意を肌で感じることができた。今後、未整理・未公開の文献の全容が公開されるのを心待ちにしたい。

最後に、今回の簡牘実見の実現にご高配いただいた孫占宇氏、ならびに簡牘の閲覧と会談に応じてくださった簡牘博物館の関係者各位に心より感謝申し上げたい。

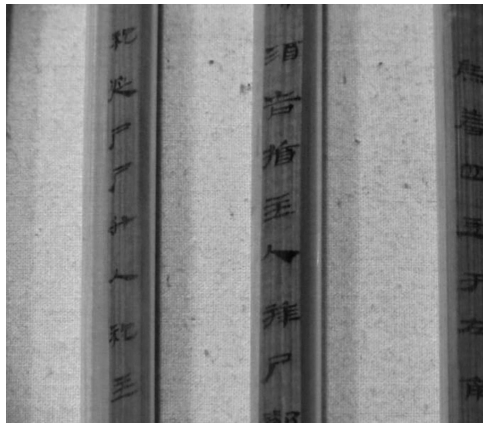
（草野友子）

注

（1）なお、甘粛省博物館のＨＰ（http://www.gansumuseum.com/）には、館内の各展示室の様子を実際の順路に沿って味わうことができるデジタルコンテンツが公開されている。

（2）『甘粛省博物館文物精品図集』や、田中利明「儀礼の「記」の問題―武威漢簡をめぐって―」（『日本中国学会報』第十九集、一九六七年十一月）、横田恭三『中国古代簡牘のすべて』（二玄社、二〇一二年五月）によれば、筆記媒体には木簡・竹簡の両種が認められ、甲・乙本は木簡、丙本には竹簡が用いられているという。また甲・乙本は四道編綫であるのに対し、丙本は五道編綫。一簡あたりの字数は、甲・丙本が約六十字、乙本がその二倍の約百十字と指摘されている。各篇にはそれぞれ次の内容が見える。甲本＝士相見之礼・服伝・特牲・少牢・有司・燕礼・泰射（以上七篇）、乙本＝服伝（一篇）、丙本＝喪服（一篇）。なお、甲本には、木簡の正面下部に排列番号が付されているものが多く含まれている。

（3）実見した木簡は、一簡あたり約六十字が記されており、四道編綫であったことが確認できた。また、木簡には「酒告旨主人拜尸奠」の記述が見え、ここからも、この文献が『儀礼』犠牲饋食礼の記された「甲本」であったと推定し得る。



実見した武威漢簡『儀礼』（木簡）

（4）陳夢家「（四）簡本儀礼的本子及其年代」（『武威漢簡』序論第二章所収、文物出版社、一九六四年九月）。なお、上記書籍中、甲・乙本（木簡）は前漢晩期（成帝前後）の鈔本、丙本（竹簡）は甲・乙本よりも古い文献であろうと指摘されている。

（5）（注2）田中利明論文参照。

（6）なお、懸泉置の「置」については、『孟子』公孫丑上に「孔子曰、「徳之流行、速於置郵而伝命」とあり、その朱熹集注に「置、駅也。郵、馹也」とある。また、郝樹声・張徳芳著『懸泉漢簡研究』（甘粛文化出版社、二〇〇九年八月）は、漢簡の内容より、「置」を郵（郵便）、厩（馬の飼育）、伝舎（宿泊）、厨（食糧関連業務）等、多種の機能を備えた機関であったと指摘している。

（7）『懸泉漢簡研究』によれば、もう一つの木簡に記されていた内容は、次のとおりであるという。

☒□子張曰、執徳不弘、通道不篤、焉能為有、焉能為亡。

●子夏之門人問交於子張、子張曰

また同書十八頁には、典籍の残篇として「之祚責。悪衣謂之不肖、善衣謂之不適、士居固有不憂貧者乎。孔子曰、本子来」や「欲不可為、足軽財。彖曰、家必不属、奢大過度、後必窮辱責其身而食身、又不足」という内容が見られることも紹介されており、懸泉置漢簡中には、『論語』子張篇以外にも、孔子や儒家経典に関する文献が含まれていたことが窺える。

（8）阮元撰『十三経注疏』（芸文印書館、一九六五年六月）、朱熹撰『四書章句集注』（新編諸子集成、中華書局、一九八三年十月）、ともに文字に異同は見られない。ただし、「吾聞諸夫子人未有自致者也」について、阮元の校勘記に、「漢石経作吾聞諸子人未有自致也者」とある。

（9）天水放馬灘秦簡の書写年代については、多くの研究者が戦国晩期とするものの、一部に秦の統一後の書写とする見解もあり（海老根量介「放馬灘秦簡鈔写年代蠡測」、武漢大学簡帛研究中心主編『簡帛』第七輯、上海古籍出版社、二〇一二年

十月）、定論をみるには至っていない。

（10）劃線とは、一部の竹簡の背面にみえる切り込み状の斜線。劃痕とも言う。竹簡の再排列を行う際に重要な指標となる。

（11）敦煌馬圈湾漢簡は一九九一年に『敦煌漢簡』（甘粛省文物考古研究所編、中華書局）として、居延新簡は一九九四年に『居延新簡　甲渠侯官（上・下）』（甘粛省文物考古研究所・甘粛省博物館・中国社会科学院歴史研究所・文化部古文献研究室編、中華書局）として、天水放馬灘秦簡は二〇〇九年に『天水放馬灘秦簡』（甘粛省文物考古研究所編、中華書局）として出版された。また、近年、「甘粛秦漢簡牘集釈叢書」として、『天水放馬灘秦簡集釈』（張徳芳主編・孫占宇著、二〇一三年三月）および『敦煌馬圈湾漢簡集釈』（張徳芳著、甘粛文化出版社、二〇一三年十二月）が出版されており、居延新簡・武威漢簡についても刊行される予定である。肩水金関漢簡については、『肩水金関漢簡』（甘粛簡牘保護研究中心・甘粛省文物考古研究所・甘粛省博物館・中国文化遺産研究院古文献研究室・中国社会科学院簡帛研究中心編、中西書局）として全五巻の計画で出版が進んでおり、第一巻は二〇一一年、第二巻は二〇一二年、第三巻は二〇一三年にすでに刊行され、二〇一四年と二〇一五年に第四巻・第五巻が出版予定である。

（12）大庭修『漢簡研究』（同朋舎出版、一九九二年）など参照。

（13）会談の中で、『肩水金関漢簡』第三巻に『論語』類の文献があると教示いただいた。実際に確認したところ、「子曰、自愛仁之至也、自敬知之至也」（73EJT31：139）という一文が見える簡があった。ただし、『論語』には同文は見られず、揚雄『法言』君子の中に類似する一文がある（「人必先作、然後人名之。先求、然後人与之。人必其自愛也。而後愛人諸。人必其自敬也。而後人敬諸。自愛仁之至也、自敬礼之至也。未有不自愛、敬而人愛、敬之者也。」）。

また、同じく第三巻には、『詩経』『孝経』『易経』の一文が見える簡も含まれている。以下、参考までに列記する。

▼詩曰、題積令、載驀載鳴。我日斯邁、而月斯逝。蚤〓興〓夜〓未〓毋〓天〓壅〓所〓生〓者唯〓病〓乎〓其勉〓之〓（73EJT31：102A）

『詩経』小雅・小宛

「題彼脊令、載飛載鳴。我日斯邁、而月斯征。夙興夜寐、無忝爾所生。」

▼上而不驕者、高而不危。制節謹度、而能分施者、満而不溢。易曰、亢龍有悔、言驕溢也。亢之為言（73EJT31：44A＋T30：55A）

『孝経』諸侯　「在上不驕、高而不危。制節謹度、満而不溢。高而不危、所以長守貴也。満而不溢、所以長守富也。」

『易経』乾　「上九、亢龍有悔。」